

国家観歴史観の再築

菅考之著 「知恵なくば、国起たず！ 誇りなくば、国護れず！」（高木書房・一六二〇円）はオーソドックスな国家観歴史観を記述した本である。しかし我々には常識でも、これを非常識、異端の思想と敵視する勢力がある。その勢力は「民意」を盾にしているので強大で屈服させるのは難しい。

国を護り家族を守るのは誰だ

著書の二三八ページにこうある。「国会周辺では何度も大規模な抗議集会やデモが行われ、最近では一般市民に加えて有名芸能人や日弁連の幹部弁護士、さらには著名な憲法学者までが参加して『安閑連連法案は憲法違反！』『九条と叫ぶ老人たちに、ぜひこの本を読んでもらいたい。もつとも『読んでください』と本を渡しても百人のうち九十九人は一ページ眺めて投げ捨てるだろうが』」

このような形で世論形成される中、テレビのインタビューに答える二十代、三十代の若者は「戦争に行きたくない。だから集団的自衛権の行使には反対！」と答え、三十代、四十代の夫婦からは「自分の息子を戦争には行かせたくない。だから、憲法護持、九条護衛、若い世代だけではない。団塊の世代と言われる六十代、七十代の老人も同様に『反国家』の野党の演説に『そうだ！』と呼応している。」

それは、多くの日本人が「今の方がラクでいい。このままがいい」と考えるようになってしまったからだと思えます。「自分たちが戦うより、アメリカに任せてもらおう方がラク」「自分は自分の幸せだけを考えていた方がラク」「お金を手に入れることだけに集中した方がラク」という「ラク」に慣れてしまったからです。

「放射能は怖い」が叫ばれ続けるうちにこれが真実になり「原発再稼働反対」に賛成する人の%が上がる。恐くないことの科学的説明や原発なしの経済的損失を示しても、そうしたことを言う者をまともな人間ではないかのように憎まじげに睨みつける。

菅氏の主張は正論であり説得力がある。国のことなど考えもせず、人として文化を継承する使命を放棄し、自己を律する人間としての誇りを失い、食物がうまいはずいといったことや遊びしか頭にない日本人にやりきれない思いをぶつけている。

経宮管理講座 333 染谷和巳

国後・捉振・齒舞・色丹の四島で実効支配を強めている。多くの日本人は自分の生活とは無関係だから、これらのことにも関心を持たない。日米が安保条約を結んだ六十年前とは、国防・安全保障に関わる環境は大きく変わっている。この変化を日本人はどう思うのか。

「安全保障関連法の制定により平和的生存権や人格権を侵害され」

「安保法で苦痛」長野で二九二人提訴

この見出しの意味が解るか。私には解らなかつた。全文そのまま載せる。

「安全保障関連法の制定により平和的生存権や人格権を侵害され」

「私はアイウィルに入社し、まだ十一月目の新人です。今までは日本という国を知らなくても生活できる、歴史なんか知らなくてもいいだろうと思っていました。確かに日本という国、歴史を知らなくても生活はできます。」

ちんたら坊やが国士に変貌す

「営業部員 武藤求之の感想」

「私はアイウィルに入社し、まだ十一月目の新人です。今までは日本という国を知らなくても生活できる、歴史なんか知らなくてもいいだろうと思っていました。確かに日本という国、歴史を知らなくても生活はできます。」

「国民の安全と平和を守るには」

「多くの日本人が、この本に書かれていることを知らないから。なぜなら教わっていないから。読めば読むほど自分が平和ボケ